

重度肢体不自由者における支援技術のはたす役割と課題に関する研究

A study about a role and the problem about the assistive technology for the people with severe physical disabilities

小柳 花綾 (Karin Koyanagi) 指導：畠山 卓朗

第1章 研究の背景と目的

近年、障害がある人たちがより良い人生をおくるにあたり、生活を支援する支援技術が注目されている。支援や支援技術も、本人の気持ちや声を重要視したものでなければ、当事者不在の支援・支援技術となってしまう。「障害とはなにか」という問いに当事者の視点を取り入れ考察することが、より良い支援のあり方やこれからの社会を考える上でとても重要であるといえる。

本研究では特に支援や支援機器の必要性の高い重度肢体不自由者について取り上げ本人にとって障害とはなにかということや支援技術のあり方等を個人のライフストーリーという視点から検証する。さらにその中で、支援機器の役割や効果を検証する。

第2章 障害者を取り巻く環境

障害者について、障害者数や障害の定義を取り上げ、考察する。そして世界での障害者人権運動の動きを通し障害や障害者への権利や考え方の変遷を考察する。そしてこれらをふまえ、本論文で取り上げる問題点を示す。

第3章 障害者の生活を支える機器について

ここでは、支援機器とは何か、複数の定義等を取り上げ、多様な視点からの考察により明らかにしていく。

第4章 M-GTAによるインタビュー調査

この章では、インタビューの調査方法と質問事項、M-GTAについての分析方法について示す。

第5章 支援機器について (インタビューより)

支援機器に関し、インタビュー調査で得たデータをもとに、分析ワークシートを用いつつ考察していく。

第6章 障害者自立支援

障害者の自立支援を目的とした障害者支援工学にこの章では注目する。支援機器について、ここでは具体的に紹介していく。

第7章 支援機器の分類

支援機器には様々なものがあるが、それはどのように分類されているのだろうか、支援機器の分類として、身体に対する密着度による分類と、ISO (国際標準化機構) における福祉用具の機能に基づいた目的の分類を取り上げる。

第8章 生活の場での機器

どのような支援機器を使用するか、その機器を使用するひとりの生活環境等、様々なことを視野に入れ考えることが必要である。ここでは、導入時に気をつけること、使用者のニーズの把握、そして支援機器の安全性についてとりあげる。

第9章 福祉サービス

福祉サービスについて、人的支援と公的支援について、分析ワークシートを用い、考察する。

第10章 障害福祉サービスの利用状況と満足度

障害福祉サービスの利用状況と満足度について取り上げ、

必要とされている支援がなされているか、当事者中心の支援となっているか考察する。

第11章 遺伝子診断と治療

近年、遺伝子診断・治療技術が注目を集めているが、遺伝子治療により、障害の原因となる遺伝子を排除し、出生前から障害を排除することで障害の根本治療と考える、という意見もあり、この技術には、障害に対する考え方や向き合い方が厳しく問われるといえる。

ここでは遺伝子診断・治療についてアンケート・インタビュー調査に加え、この技術に賛成・反対を唱える意見を取り上げる中で考察していく。

第12章 障害者の社会参加に関する意識調査

国民の障害者に対する意識について、インタビュー調査での発言をふまえ包括的に考察する。

第13章 本人の「思い」の発見がもたらすもの

インタビュー調査による分析ワークシートを示し、分析の過程を示す。そして、それに基づいた理論ノートの作成をし、分析・考察していく。本人が普段の生活で楽しみにしていることや、他者とのかかわりで気づいたこと等、本人の言葉からの「思い」を考察し、当事者中心のより良い支援につなげる提言とする。

考察

インタビュー調査による分析ワークシートをもとに、分析を行う。ここでは、本論文で取り上げた各論点への考察と、本論文全体の考察を示す。

今後どう取り組むか

インタビュー調査の分析の結果、本人が安心できることの重要性が検出された。精神的フォロー等も通し、本人が安心して、生活できたり支援を受けたりできることが良い支援に繋がるといえる。支援では、精神的フォローも含めた対応を今後考慮していく必要があるといえる。

研究の限界と今後の課題

本研究において、M-GTAを研究方法に採用したのは、本人にとっての障害の意味や支援や支援機器の効果を探索的に知るための方法としては適切であったと思われる。

しかし、調査対象とした障害に限られており、重度肢体不自由以外の疾患をもつ方へ、今回の考察が当てはまるとは限らない、という限界がある。

今後は、これらのことを視野に入れつつさらなる研究を行う必要がある。

また、本研究では、当事者の語りをもとにした分析を行ったが、支援の相互作用という側面を考えると、支援従事者の語りを通じた分析も必要であったといえる。この反省点についても今後の課題としたい。